

鹿大広報

No.159

Feb/2002

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会

特集：「飛躍」



<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>



Kagoshima University

鹿大広報

【FEBRUARY 2002 No.159】

目次

特集 飛躍

新しい門出を祝福する ……………学長 田中 弘允 …… 3

卒業・修了にあたって …………… 4

陳 俊甫 (法文)	稲丸 雅文 (人文社会院)	鬼塚 慶子 (教育)
西 耕治 (教育・院)	小出 理恵 (理)	永池 宏 (理工・院)
飯田 啓太 (医)	安田 智嗣 (医・院)	寺原 英子 (歯)
吉森 史 (歯・院)	佐藤 由弦 (工)	荒川 勝広 (理工・院)
田畑 克哉 (農)	竹尾 暁彦 (農・院)	町田 依里 (水産)
河内 仁史 (水産・院)	ロレーナ.D.サルバドル (連大)	
横山 恵子 (医短)	行徳 藍 (医短)	王 宇 (工)
Sameer William Qubain (医・院)		

退官にあたって …………… 9

仲村 政文 (法文)	福元啓二郎 (法文)	厚東 孝治 (教育)
坂尾 隆 (教育)	真田 克彦 (教育)	末永 政治 (教育)
酒井 幸吉 (理)	大庭 紀雄 (医)	瀧川 守國 (医)
宮田晃一郎 (医)	小椋 正 (歯)	中西 喜彦 (農)
宮内 信文 (農)	満 浩一 (法文)	岩元 秀樹 (理)
有村 勝 (教育)	片平 紘治 (事務局)	新元 勝 (工)
織地 幸一 (事務局)	川上 玲子 (教育)	西久保レイ子 (医病)
寿福美智子 (医病)	白澤 彰子 (医病)	山崎 京子 (医病)

特別寄稿

道伝子診療の進歩に想う

光と影 ……鹿児島大学運営諮問会議委員(鹿児島県医師会会長) 鮫島耕一郎 …… 15

学内だより

○平成14年 年頭の挨拶 ……………学長 田中 弘允 …… 16

○随 想

スウェーデンの思い出 ……………農学部 寺岡 行雄 …… 18

○保 健

下痢症 急性下痢症について ……保健管理センター所長 前田 芳夫 …… 19

○新任教官紹介 …………… 20

○学内ニュース …………… 22

○図書館だより …………… 25

○行事予定 …………… 26

○編集後記 …………… 26

表紙デザイン

「新しい世界へ飛躍しようとする姿を、色と形で表現した」

教育学部 助教授 美術教育講座 小江 和樹

新しい門出を祝福する

学長 田中 弘允



平成14年3月31日をもって無事定年退官されます鹿児島大学の教職員の皆様、永年にわたり本学のために御尽力をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

皆様が高等教育に貢献されたこの20世紀後半は人類史上かつてない激動の時代でありました。わが国は太平洋戦争に敗れ、廃墟と化しましたが、驚異的な復興を遂げついに世界第2位の経済大国にまで発展し、国民は物質的に豊かな生活を享受することができるようになりました。しかし、1990年代に入ってバブル経済は崩壊し、いまだに回復の兆しを見せていないのであります。また、環境破壊、人間性の不在、社会不安、精神の衰弱、世代間ギャップ、いじめ・不登校・学級崩壊などの教育上の諸問題等様々な問題もまた提起されました。昨年度は小泉内閣による聖域なき構造改革の方針が打ち出され、厳しい改革が進められつつあります。

一方、世界情勢を見ますと、1991年のソ連邦崩壊により約90年続いた冷戦構造が消滅し、アメリカ型資本主義体制がグローバル化の波に乗って世界を制圧しつつあります。しかし、この体制には大きな限界があることが明らかになっています。地球環境の破壊、貧富の差の拡大、民族対立の激化などの地球的課題の提起がその例であります。昨年9月11日のアメリカにおける同時多発テロは、私達にテロへの憎しみとその根絶への決意をもたらしましたが、他方では現在の世界システムの限界を象徴的に実証したものであります。今まさに世界は、転移の時期、カオスの時期にあると言われてはいますが、よりよい秩序を持った新しい世界体制を樹立することは私達の義務であろうと思われまます。

鹿児島大学は、終戦に伴う学制改革により1949年に発足して以来、途中大学紛争という大きな試練を経験しましたが、教育研究は質量共に発展して参りました。すでに6万3千名の卒業生が社会で活躍しています。現在、8学部と8大学院研究科と学内共同教育研究施設等が整備され、わが国でも有数の総合大学に成長することができました。

このような鹿児島大学の発展は、皆様の教育・研究・管理運営における御努力が大きく寄与したのであります。私達はこのことを忘れることなく更なる発展に向かって前進したいと存じます。今後とも御指導御鞭撻の程よろしくお願いいたします。

さて、皆様は明日から第2の人生を始められます。それは今までとは違い、自由な時間や空間に恵まれた日々であろう

かと推察いたします。

国家的見地から見ますと超高齢化社会ではいわゆる老人パワーの役割が注目されています。日野原重明氏（聖路加国際病院理事長）は、75歳以上の心身ともに健康な人を新老人と名付けて全国的な組織を作り活動を開始されました。私はかねてからこの激動の半世紀以上を身をもって経験された皆様からの文化の継承こそこの国の将来に大切だと考えています。この点についても是非私達に対して御援助をいただければと思っています。皆様の新しい門出を心から祝福申し上げます。

この度鹿児島大学において学業を達成し、卒業される学部ならびに大学院学生の皆様、おめでとうございます。皆様の御努力に心から敬意を表します。

本学は、安永2年に創立された藩学造士館にその源をさかのぼることができる伝統を持った質量共に全国有数の総合大学であります。また、この薩摩の地は明治維新の原動力となった偉人を数多く生み出しています。

皆様はこのような鹿児島大学で青春の大切な時期を過ごし学業を成し遂げたことを、まず胸に刻み、皆様の誇りとしていただきたいと思います。現在も速いスピードで進行しつつあるグローバル化の時代においては、自らのアイデンティティをしっかりと持たなければなりません。それは自分自身だけが持っている他人にはない独自のものであります。その際、高等教育を受けた大学が本学であるという事実は皆様のアイデンティティの重要な部分を形成していることを認識してもらいたいと思います。

さて、皆様は明日から1人の社会人です。社会は柔軟な頭脳と健全な身体を持ちかつチャレンジ精神旺盛な「ぼっけもん」の皆様を心から待っています。社会は、先に述べたように国内でも様々な課題を抱えており、世界的に見ても構造的カオス状態に陥りつつあると言ってもよいでしょう。皆様はこのことを自覚的に認識し、社会的課題に直接間接に取り組みその解決に努力して欲しいと思います。更に進んで、人間性豊かな社会、すなわち人間1人ひとりが政治・経済・社会・科学技術・健康・医療などをコントロールできるような世界システムの構築に参加してください。21世紀社会は皆様の双肩にかかっているのです。鹿児島大学のモットーである「維新の気風」をもって社会に貢献されることを心から祈ります。



卒業にあたって

法文学部 経済情報学科 陳 俊甫

ふと思いついたら、科目等履修生の1年を加え、留学生としての鹿大での学生生活も5年を過ぎようとしています。5年という歳月が決して短くはないが、あつという間に過ぎてしまった感じがします。

きっとそれは、この学生生活が何もかも目新しくて刺激的で、学ぶことの楽しさとしんどさを実感した毎日だったからでしょう。そのおかげで、私は自分の目指すべき将来を見つけることができました。ここでの学生生活は、私にとってかけがえのない思い出となりました。

いざ、この生活に終わりを告げる時期がきたと思うと、心の中に辛さと喜びが混ざり合い、何とも言えない気分になりました。この辛さは恩師や友達との別れであり、喜びは努力によって大学を卒業し、新たな門出を迎えることができたことです。

最後に、この場を借りて、これまで私を支えてくださった方々に心から感謝の意を申し上げたい。皆さんのサポートなしには、私が決して鹿大を卒業することができないでしょう。ありがとうございました。



飛躍

教育学部 学校教育教員養成課程 鬼塚 慶子

早いもので、4年間の大学生活も終わる。私にとっての大学生活は、楽しく、また、自分と向きあう時間の多い充実した日々だった。特に、私の大学生活を充実させたものは部活動だった。柔道部に所属し、4年間多くの先輩方や後輩達、仲間と共に汗を流した。入部したての頃は練習が辛く、泣きながら練習したこともあった。その度に、「こんなことで負けるか!」と辛さをのり越えてきた。九州大会や全国大会にも出場でき、最高の思い出ができた。

これから先、社会へ巣立つ。今までのような甘えた考えでは立派な社会人にはなれない。人に甘えず、自分に厳しく努力しなければならない。困難にぶつかったら、きっと柔道部での日々を思い出し、また自分を奮い立たせるだろう。

お世話になった先生方、友人、家族に感謝し、これからの人生を精一杯歩んでいきたい。



飛躍のための助走

人文社会科学部 稲丸 雅文

大学院を修了するにあたっての気持ちとして、敢えてはっきり言わせてもらえるなら、「特にはない」と言うのが正直なところである。それは大学院在学の間、特に何もなかったのが感想がないという訳ではない。むしろ自分にとって、この大学院の2年間はひたすらに行動したために、それこそあつという間に過ぎてしまった。自己満足かもしれないが、この大学院生活で得たものは大学生活4年間のそれよりも大きいと考えている。無論、大学院修士2年間に有意義に過ごすことができたのは、自分に様々なチャンスを与えてくれた教官の方々や両親、共に学んだ学友を含めた多くの人のおかげであることは肝に銘じている。しかしながら、なぜ「特にはない」という気持ちになるのかと言うと、大学院は自分の飛躍のための階段か助走に過ぎないからである。自分にとって修了したことは一つの区切りでもあるが、それだけで到達点ではないと思う。だから今は「特にはない」としか言えない。



修了にあたって

教育学研究科 西 耕治

大学院での2年間は学ぶことの楽しさを実感した2年間でありました。修了にあたり心よりお礼申し上げたいと思います。

我々職業を持つ社会人は、いつも何かに追われ、立ち止まることを許されず、走り続けなければならない職責や使命を抱えています。それがこの2年間、或いは1年間は立ち止まり、振り返り、この後進むべき未来について、幅広い視野と知見を持つ先生方に教を請いながら深められたことが何よりも大きな財産となったと嬉しく感じています。

修了にあたり、どれぐらいのものが身に付いたのか今はよく分かりませんが、新しい教育が始まる2002年をさらなる飛躍の年にしていきたい、そう強く決意するところです。

最後に、大学院派遣にあたり機会を与えてくれた鹿児島県教育委員会、並びに受け入れてくださった鹿児島大学大学院、及び関係各社の方々に心よりお礼申し上げます。



大学生活を振り返って

理学部 生命化学科 小出 理恵

大学に入学してまず、今までとの制度の違いにとっても驚きました。高校までは、時間割や授業科目など始めから決まっていることが当然でしたが、大学では取得しないといけない単位だけ決まっていた自分がどの時間に、どんな教科を入れるかは自主性にまかされていたからです。そして、鹿児島大学ならではの盛り上がりを見せる大学祭にも強い印象を受けました。非常に盛り上がっていて、毎年その雰囲気を楽しんでいました。

大学生活を振り返って、この4年間で過ぎるのはとても早かったと思います。特に、講座に配属されてからの1年間はあっという間でした。研究をしながら就職活動を行ったことも原因の1つでしょう。就職活動は、予想通りとてもきついものでした。しかし、希望の会社に就職が決まりほっとしています。あえて言うなら、サークルに入っておけば良かった、ということでしょうか。



大学で学んだこと

医学研究科 安田智嗣

4年前に大学院に入学し、いよいよ卒業の時を迎えました。無事にここまで来られたのは、佐伯教授、小林助教授を始め、多くの方々の御指導そして協力があったからに他なりません。また迷惑をたくさん掛けた家族にも感謝します。

この原稿を書くにあたり、長いようで短かった4年の間に、「一体自分は何を学んだのか?」と考えてみました。もちろん大学院には学位授与という目標がありますが、一番の大きな成果は、「研究者としての態度」を少しだけでも身につけることが出来たのではないかと思います。これは自分の出したデータに飽くまで客観的で、謙虚であるということです。実験を始めた最初の頃は、予想した結果が得られないとあまり深く考えず、また同じことを繰り返し失敗したものでしたが、なぜ予想した結果と反するのかを考えるうちに、自ずと道が開けました。この研究者としての態度は、生き方にも通じ、これからの人生でつまづいた時に私をしっかりと支えてくれるものと信じます。大それたことを書きましたが、まだまだ学ぶべきことは多くあり、社会人になっても謙虚に頑張りたいと思います。

「大学生活で得た事」

理工学研究科 永池 宏

長かったようで短かった6年間の大学生活が終わろうとしています。この6年間はこれまでの私の人生の中で最も変化の大きかった時間だと思います。勉強はもとより、生活するための自立やアルバイト、お酒の飲み方など多くのことを経験し学びましたが、そのなかで最も自分の財産になったものは人間関係です。必ずしも多いとはいえませんが、幸いにも良き先生方、友人、及び先輩や後輩に出会う事ができました。これらの人と築き上げたつながりは何物にも換え難いものです。これから進む社会においては、これまで以上に人間関係が重要となってくるので、広い人間関係を築いていく事が大切だと考えています。

これから社会に踏み出していくうえで、不安も多くありますが、それ以上に期待に胸を膨らませています。たとえ困難に直面したとしても、大学時代に得た経験を糧として乗り越えていこうと思います。

飛躍する君たちへ

医学部 医学科 飯田 啓太

最近、今だけに生きる人が多くなっているような気がします。それが、自分の意思か、社会の流れかは分かりません。確かに今しか出来ないこと、今やらねばならないことを精一杯やることも重要なことですが、これからは自分で自分の将来を考えていかねばなりません。当り前のことです。であるならば、自分の行く末を決定するに必要な決定も、自分で行わねばなりません。納得のいく決定は、十分な考察によりますが、十分な考察には、十分な量のそして正確な情報、自分で感じる事、他人の意見、その他様々な要素が必要になります。学問するのは当り前の学生の義務であり特権です。ならば、未熟であることも学生の特権です。激論を交わし喧嘩寸前まで熱くなることも、いろんな所に入り込んで体験することも全て学生の特権です。是非ともそういった特権を生かし、より多くの考察の機会を持つようしててください。そうすれば、より多くの飛躍する方向性が見つかると思います。頑張ってくださいね。



卒業するにあたって

歯学部 歯学科 寺原 英子

早いもので、私が入学してから6年が過ぎようとしている。入学当時は6年間という長い日々を思うだけで溜息が出そうであった。しかし、そう思っていたのもつかの間、すぐに勉学・部活動・アルバイトなどで忙しく過ごすこととなった。その日々の中で、社会の厳しさ、人の温かさ、人間関係の難しさ、そして自分の甘さなど多くのことを知ることができ、学ぶことができた。辛いことや楽しいことを経て精神的にも大きく成長できたように思う。また、この6年間で色々な事を学び、考え進みたい道を見つけることができた。卒業を控えた今、自分の中に理想はあるものの、中身は自分自身満足できるものではない。これからも多くのことを学び、吸収していき一步一步理想に近づけるよう日々努力していきたい。



分岐点での選択

歯学研究科 吉森 史

4年前に歯学部歯学科を卒業した時に、就職するか大学院に進むか非常に悩みました。私の場合多くの方々に迷惑をかけ歯学研究科に入学することを選択し歯周病治療学の研究を開始しました。学部の時とは違い、自分のしたいことを制約の少ない中でいろいろ模索することができました。また、講座の性質上臨床経験も積むことができました。その中で臨床が多量の基礎的な研究の基に成り立ち基礎的研究、臨床治験の両方のバランスがとれその両方が成立していることを痛感しました。実験の基礎から平日、休日問わず夜遅くまでご指導、ご鞭撻していただいた諸先生方、大学院生活の選択肢を与えてくれた両親、多岐にわたりお世話していただいた講座の諸先生、事務官の方に心から感謝しています。情報がはびこり時としてそれらの波にのまれそうな時代です、これからは、広い視野を持つ姿勢は変わることなく、なおかつその情報が今必要なのかどうか多角的に見極めることを忘れることなく行動していきたいと思います。4年前悩みに悩み研究科を選択してよかったと思います。



不確定性の中で

理工学研究科 荒川 勝広

「不確定性」というものは私の研究のキーワードでもあるが、現在の生活の中において確定的なものというものは存在しないのではないかと。その裏返しとして、予想だにしない事が起こる可能性というものとは0%ではない。21世紀最初の年においても予想を遥かに上回る事件が相次いで起こった。その中で私たちはどのように生きていくかということが問題となる。そこで私が提案するのは「想像」と「創造」である。情報化社会の現代では、あらゆる物事についての溢れんばかりの情報が散乱しているが、その中でも必要である情報を取捨選択し、その情報から想像されうることに対処する方法を創造するということである。これら「想像」と「創造」の力を養う方法は学習しかないと思う。限りある大学生活においてはこれらの力を養うには時間が短すぎると感じるが様々な分野の学習をすることで少しは私自身これらの力が身に付いたのではないかと。不確定性の中でよりよく生きるため、学習を続けていくことが必要であろう。



Viva! 寮生活

工学部 海洋土木工学科 佐藤 由弦

まさか私が、鹿大の広報に載せるための原稿を書くことになるとは…。しかし、めったにない機会なので、私の大学生生活（寮生活）について書いてみようと思う。

私が生活を送った場所は、「学生寮」である。「寮」といえば、様々な噂やイメージが浮かんでくるであろうが、大体皆が思っているような所そのものだ。私もこれまで四年間よくここで暮らせたなあと、感慨にふける時がよくある。

一般的に、寮生活は春と秋が活発な時期である。春は、新入生に学生としての心構えを教えるために、一週間に渡り歓迎会が開かれる。天国でもあり地獄でもある。秋には、大学祭と寮祭があり、このお祭りシーズンならではの光景やドラマを見ることができる。普通に一人暮らしをしていては、体験できないことばかりであった。

振り返ってみれば、嫌だったことも今となっては良い思い出である。きっと、これから厳しい現実が待ち受けているだろうが、これまでの寮生活等を糧にして頑張っていこうと思う。



卒業にあたって

農学部 生物生産学科 田畑 克哉

4年間はあっという間だった。1年の時は何も考えることなく、2年の時に大学に入ってきた目的を思い出し、3年で家畜の面白さを認識し、4年で卒論に追われパタパタと卒業が迫ってきた。私は3、4年で一生の楽しみを見つけたのではないかと思う。

そして、自分にないものを持っていて尊敬できる人、一緒に馬鹿出来る人など様々な人たちと出会った。はっきり言って大学生活がこんなに楽しいものになるとは思わなかった。人間関係で悩んだ時期もあった。しかし、振り返ってみると楽しかった思い出ばかりである。

卒業はまったく実感が湧かない。社会に出ることに不安はいっぱいある。でも、「何とかなる」と思っていけば何とかなるのではないかと思う。悪い言い方をすれば少し甘えがある。しかし、良い言い方をすれば少し前向き。私は後者をとりとうと思う。前向きに考えれば、少しでも前進出来るはずである。人生は楽しいこうと思う。



飛躍

農学研究科 竹尾 暁彦

私は6年前の春、この大学に入学し今日まで歩んできた。あつという間の6年間だったが、いろいろ思い出に残る日々だった。

入学してからの3年間は、部活動やバイトなど、どちらかというと勉学とは異なる所で懸命になっていた。しかし今振り返るとそれまでの高校生活では体験できなかったことを経験したり、今でも付き合いの深い友を得る良い機会だったと思う。

私は今現在、修士論文のまとめの最中である。4年間で卒業する道もあったと、時々思うこともあるが、大学院生として2年間、自然科学の研究に勤しんできてよかったと思う。研究者というには未熟だが、真理をひたすら追って来た日々は、部活動と同じように充実していた。

あと数ヶ月で卒業する身だが、私がここまで歩んできたのも、多くのお世話になった方々のおかげである。一人の人としては、まだまだ未熟ではあるが、その方々の為にもこれから益々精進して行きたいと思う。



飛躍

水産学研究科 河内 仁史

「我が大学生生活に悔い無し」と言えるぐらい自信を持ち、卒業したい。と思いついた入学した日から6回目の冬がやって来た。

そして今、自分の学生生活を思い返すと

「いや～失敗した～」

この言葉が結果として多く出てくる。

後悔しているかと聞かれれば後悔はしていない。

これらの言葉が出る過程まで自分なりに考え、決断をし、行動したことは確かである。

私から後輩に向けてのメッセージがあるとすれば、「何かをしようとする気持ちが大事だ」ということ。目標や夢を持つことは、すでに目標や夢の半分を達成したことになる。大きくなくても良い、小さくても目標や夢を持つことが大学生活を楽しく、有意義に過ごしていけるのではないかなと思う。何かオヤジくさい文章になったが、最後に「大学生生活は長い、大学生に忙しいという言葉はない、ガンバレ！ 楽しめ！！」以上。



大切な大学生生活

水産学部 教員養成課程 町田 依里

あつという間の大学4年間でした。そして大変、中身のある4年間でした。大学入学の頃の自分と比べれば、今の自分

は、何倍も素敵になっているような気がします。それは、この大学生生活で得た経験、知識、そして出会いというものから生まれた自信からきているものだと思います。大学というものは、時間というものを与えてくれました。この時間の中で、大学だからこそ体験できる数多くのこと、さらに、この時間があつたからこそ考えることができることも沢山ありました。本当にこれらは、今の自分の大きな糧になっています。もし大学で学ぼうと思わなかったら、私の人生の中でこれらは欠けていることになったと思います。ですから、この大学で得た貴重な糧を決して無駄にすることなく、これからの人生を歩んでいこうと思います。

鹿児島大学が大好きです。この大学の卒業生になれることを誇りに思います。



日本で学んだこと

連合農学研究科 ロレーナ・D・サルバドル

日本へ来て5年が過ぎようとしています。日本での主な目的は、少しでも多くの専門知識を習得し、進学するためでした。今、そのほとんどが達成でき、幸い

博士課程3年間で学位取得となりました。専門分野での高い知識の習得はもちろん、日本人や他の国からの留学生と触れ合うことによって、いろんなことを学び、人として大きく成長できたと思います。初めは日本と母国フィリピンの文化の違いに戸惑いました。言語の違い、食文化の違い、その他様々な生活様式の違いに加え、家族と離れて生活することは初めてだったので、ホームシックになったこともあります。しかし、日本での経験は自分自身を強くし、自分の性格を良く知ることができました。5年間の滞在は様々な人々との出会いのチャンスを与えてくれて、そんな人々に支えられ学ぶことが多かったです。日本は第二の故郷と思っていますし、日本を離れることが寂しくなることもあります。思い出と学んだことはいつまでも忘れません。最後にこの文を通して、毎日の生活の中で関わりを持ったすべての人に感謝の気持ちを伝えたいです。



出会いという宝物

医療技術短期大学大学部 助産学特別専攻 横山 恵子

平成13年4月、期待に胸を躍らせ、憧れの助産婦への第一歩を踏み出した喜びをかみしめながら、助学生としての生活がスタートした。様々な実習や講義の詰まった1年間のカリキュラムのハードさに驚いている暇もないくらい、そして、後ろを振り向く暇もないくらいに、毎日、毎日がものすごいスピードで過ぎていった気がする。そして、そんな日々を振り返り、今、思うことは、この1年で自分にとって、多くのかけがえのない出会いがあったということだ。未熟な私に身をゆだねてくださった産婦さんとその家族、実習先の助産婦としてももちろん女性としても尊敬できる指導者、そして何といっても同じ志をもつ助学の仲間と、いつも私達20人にエールを贈ってくださった助学の先生方である。私はこの出会いでたくさんのことを感じ、たくさんのすばらしいことを学ぶことができた。一期一会という言葉があるが、助学での出会いは私の大きな宝物である。



卒業にあたって

工学部 情報工学科 王 宇

日本に来てから、あっという間にもう五年間が経ちました。日本に来たとき、私の保証人が空港へ迎えに来てくれた。こんにちはと挨拶を言ったけど、それから私はさっぱりわかりませんでした。赤塚学園で日本語を学び、ペンと紙の交流からはじめ、やっとコミュニケーションの壁を乗り越えました。

鹿児島大学に入学してから、授業、アルバイトの生活がほとんどです。もっと本を読みたい、もっと時間がほしい、私は不安や緊張を感じました。そんな私を癒してくれたのは日本の家族、多くの先生と友人たちの激励でした。鹿大でたくさん日本の青年と出会い、一緒に多くの楽しい時を過ごすことができ、自分にとって、本当に大切な思い出です。

去年の八月、大学院に合格しました。これからも、すばらしい友達をつくり、次の目標に向かって頑張りたいと考えています。そして、私を手伝ってくれた人々に感謝したいと思います。



修了にあたって

医療技術短期大学部 地域看護学特別専攻 行徳 藍

修了を目前に控え、専攻科での一年間を振り返ると、様々な思い出がよみがえってくる。この一年間は、次々にやってくる課題に追われ、忙しい日々ではあったが、それだけにとっても充実していたと思う。

専攻科では、臨床看護とは違い、病気の有無を問わず地域社会に住む全ての人々を対象にした看護を学んだ。看護婦は自分に向いていないかもしれないと感じていた私にとって、この分野はとても興味深く、今は、自分の選んだ道はこれでよかったんだと思えるまでになった。また、専攻科で出会った20名の友人達は、何ものにも代えがたい私の財産となった。レポート・グループワーク・実習と息つく間もなくやってくる課題に掛けそうになることもあったが、20名がいたからこそやり遂げることができたと思う。これから何年経っても、どんなことがあっても、みんなと過ごしたこの一年は忘れない。

20人のみんな！私はみんなに出会えてよかった！それぞれの道に進むことになるけど、また再会していっぱい語ろうね！



日常でのUnusual体験

医学研究科 Sameer William Qubain

第1外科での4年間は、困難とストレス、孤独を感じたこともありましたが、鮮烈で、貴重な体験と喜びに満ちた日々でした。

秀でた技術を持たれた寛容な師、愛甲教授のもとで研究や臨床、先進的なオンコロジカルサージャリーを体験させていただけたことを感謝いたします。

鹿児島大学病院での生活は、親切と温かい思いやりに包まれていました。卒業が近づき鹿児島を離れる日、親切で心温かな人々との別れが迫っていることを思う時、一抹の淋しさを感じます。この町の光景は私の心と魂に深く刻み込まれるでしょう。確かにここで、私の人生は豊かなものとなり、視野が広がったことを実感しています。

滞在中、数回訪れた東京は全く鹿児島とは異質な街でした。京都では偉大な日本文化にふれ、広島や長崎では人類の残虐さを目のあたりにしました。多くのご家庭に家族として迎えていただいたことで真に親切な日本人の心を知りました。又、世界学会や日本の外科学会に数多く出席し、複雑な手術にも参加させていただきました。第2内科では上部内視鏡検査や大腸内視鏡検査を学ばせていただく幸運な機会も得ました。ここでの貴重で比類のない体験は湾岸戦争下に学んだイラクでの医学部時代より明らかに厳しく、苦難に満ちたものではありましたが、私に強靱な力と実績が加わったことはまちがいありません。

退官にあたって



アカデミズムの復権を

法文学部教授 仲村 政文

鹿児島大学に赴任して以来、36年が瞬く間に過ぎました。この間60年代末に、鹿児島大学も例に洩れず、「大学紛争」という激震に見舞われました。この「紛争」

は大学内部の問題でしたが、いま、国立大学は外圧により設置形態の変更、統廃合、管理運営方式の大幅な改変などを迫られています。未曾有の「危機」に直面しているといえます。

こうした現実を前にして、ここで「古きよき時代」を顧みることが、わたくしには憚られます。そこで、先輩の一人として望みたいことの一端を述べるとすれば、大学人は一歩引いて、大学の歴史を振り返りつつ、その「存在理由」についてじっくり議論してみたいかがであろうか。恐らく、「真理の探究」「学問の自由」「大学自治」などのキーワードが改めて問われることになるでしょう。これらは大学の根本にかかわるものであり、「批判的精神」を育むものですが、いまや死語となりつつあるようです。いずれにしても、<よい意味のアカデミズム>の復権をわたくしは心から願っています。

末尾ながら、鹿児島大学の発展をお祈りします。



明日を思う

教育学部教授 厚東孝治

1974年（昭和49年）鹿児島大学に赴任して以来28年間、多くの先生方や事務官、学生に支えられ、今日まで無事勤められたことに感謝し、研究と制作に没頭

させて頂いた幸せを感じております。

東洋陶磁の原点である灰と炎が織りなす窯変の妙味に魅せられ、限りなく深奥な世界にのめり込み、ひたすら自分との闘いが永年に亘り続けられたのも、大学ならではの出来たことで、大枚が炎に消えたことを相殺しても余りある財産となりました。

また、炎一筋の研究以外とリエのない者が附属養護学校長に迎えられ、門外漢の自分を助けてくれた附属学校教官への感謝と、何度か扮したサンタクローズの目を通して見た、子供たちの本物に対する純真無垢な心に触れ、強く印象に残る6年間でした。

明日を思うとき、性急で効率のみを求める今日の社会は、学術の府 - 大学にも厳しい目が向けられ、地方によっては、教育学部の存続をも問われるようになりました。大学の教育が教員の増減によってのみ判断されようとしていることは寂しいことです。人間が人間らしく生きるために、心の豊かさを育み、芸術・文化を愛でる静謐な場を失うことを憂え、教育学部の永遠を願ってやみません。



定年教師のレジュメ

法文学部教授 福元啓二郎

1969年、私が教養部で働き始めたのは学園紛争の直前であった。「体制」に対する異議申し立ては世界的現象でもあった。

部外を転々として教授会を開いた当時の騒ぎを思い返すと、昨今の静かさは信じがたい。

しかし、真に社会を揺るがす変動は先ずビジネスの世界で始まり、私と同年輩で会社に就職した人たちは、在職中に雇用条件が改変される事態を身をもって経験した。

それが今、制度の変革をとまなう大きなうねりとなって進行中である。国立大学も例外ではなく、教養部は解体された。変革が法人化に及んだ場合、責任者は企業経営に必要な能力まで求められるだろう。社会の動向を見通す目、機敏な行動力、コスト意識など。

定年で去る教師は気楽である。インターネットのお陰で退屈しない老後になることも有難い。だが他方では、引退時の長島選手と同様に、長年在籍した鹿大がルール変更を奇貨として躍進することを心から願っている。



34年を顧みて

教育学部教授 坂尾 隆

私が鹿児島大学に赴任して34年になった。当時、鹿児島は、西駅に降り立つと、南国日生ビルが一つだけ、そそり立つ感があり、大学の周りも1/4程度が畑であった。鹿児島大学も広いキャンパスに、ゆったりと校舎が展開し、私の教育学部

では貧弱にさえ思えた。しかし、まだ日本は復興から発展へという時代で、将来はよくなっていくという希望があったし、また、若い世代には、それを担うのが我々であるという気概があったと思う。そのことは、ときには暴走といえることも引き起こすこともあって、大学紛争は、鹿児島大学では私の赴任直後であったが、その一つの現れでもあった。

それから時も流れ、社会にも大学にも幾多の変遷があった。そこで、今、大学を振り返ってみると校舎は建替えがあり、教室や、その付随の設備などは格段に良くなったが、それ以外では、定員削減があり、入試と会議も増え、忙しさも倍増したように思えるが、我々の教育や研究の環境は進歩があったのかどうかかわからないような気がする。そこに大学法人化や教育学部では統廃合問題が生じてきて、「今やめる人は幸せ」といわれる時勢となってきた。この先が明るいというより不安の方が強いように思えるのだが、しかし、大学は文化の中心として確立し発展しなければならないので、大学人は、大学に働く人も学ぶ人も、大学を発展させていくという意気込みをもって欲しいと思う。



コンピュータのことなど

教育学部教授 真田 克彦

長年にわたりコンピュータとその教育に関係してきましたが、これまでのコンピュータの発達には驚きと感嘆の念を禁じえません。最近の高性能のパソコンを使いながら、30年前に紙テープやカードを使ってプログラムやデータの入力を行っていた当時のコンピュータのことを懐かしく思い出します。今日では、どのような専攻分野の学生にもコンピュータ教育は必須となっていますが、その教育環境は必ずしも十分ではないように思われます。ただ単に授業で使うだけでなく24時間何時でも学生が使えるコンピュータとネットワーク環境を備えた施設がほしいものだと思います。

また長い月日のなかで印象に残っているのは、大学紛争の頃のことです。最近の大学改革は、ついこれと対比して考えてしまいます。いずれにしても改革された大学が自由で伸び伸びとした大学になればよいと思います。

私自身のことでは、7年前に心臓病の手術を受けましたが、その後体調がすぐれず、体力・気力ともに低下したまま退職することになり、心残りに思っています。



電子計算機“出会い”と“今”

理学部教授 酒井 幸吉

1966年4月赴任直後、本学に導入されたばかりの電子計算機OKITAC5090C(1号機)に“出会い”すっかり虜になった。理学部の富樫昭先生との出会いがきっかけである。先生から計算機の何たるかを教えて頂き、プログラムを書き、試用に熱中した。論理的に作動する計算機に魅せられ、教養数学の講義にも計算機の話を取り込んだ。また、教養部学生の成績集計プログラム(各期累積成績表の出力)を作成し1号機で処理('68~'70年)した。これは、いろんな工夫により(今にして想うと)非力な1号機の能力をフルに引きだした成果であった。

今や“電子計算機”という言葉は死語の感があり、“コンピュータ”に置き換わった。自分の研究ではコンピュータ利用はなかったが、最近の高性能パソコンの登場により事情は一変した。計算実験により理論が補強できることを幾度か体験し、グラフの個数計算やグラフ数列の構成など、“今”は研究面でもパソコンは不可欠なツールとなった。とにかくプログラミングは今も楽しい。

計算機を通して多くの先生の方に出会えたことも幸せであった。有り難うございました。



退官にあたって

教育学部教授 末永政治

県立甲南高校2年、鹿児島大学文学部(一般教養部)3年、医学部解剖学第一講座5年、教養部28年、教育学部5年、合計43年間の教師生活は、稲妻とともにさっと走りぬけた驟雨のようでもあり、いつまでも降りやまない梅雨の連続だったような気もし、何とも複雑な気持ちだ。だが、やっぱり私にとっては、「やっと卒業できる」というのが本心かもしれない。

研究面では大した業績もあげられなかったが、良き先輩、同僚、後輩の先生方のご理解のもと、学内外のさまざまな仕事を自由にやらせていただいたことは何よりも幸せなことであった。ただ、教育学部に移籍してからの最後の5年間体調をくずし、自らもって窓際を決め込んでしまい、まわりの人にご迷惑をおかけしたことには忸怩たる思いが残る。退職後は、体調を整え、澆刺とした高齢者として生涯現役を貫きたいものと鋭意準備中である。



大学病院での臨床40年

医学部教授 大庭 紀雄

昭和36年3月に大学を卒業、インターン実地修練のあと3年任期の文部教官助手に採用されたのが眼科医生活のはじまりであった。以来40年間、東京の関東通信病院勤務とミシガン大学留学の数年を除いて、大部分を大学病院で働いてきたのであるが、鹿児島大学病院での24年3ヶ月は最も落ち着いて仕事に専念することができたと思う。移転してまもない病院は新しく、前任の老朽化した大学病院とはうってかわって清潔で周囲の環境が素晴らしいこと、玄関には診療科長名が表示されていること、地元の新聞社から就任の抱負を取材されたりしたことをよく憶えている。この四半世紀、私の専門領域も知識と技術の進歩は著しく、細胞レベル(角膜内皮細胞)や分子レベル(遺伝子診断)の臨床検査が定着する一方、難攻不落に思えた硝子体や網膜のさまざまな疾病もレーザー技術や顕微鏡手術によって失明を回避することが可能になったし、眼内レンズ(人工水晶体移植)の普及は高齢者のQOLに大きく貢献している(実は、私自身も定年の1年前に老人性白内障手術の恩恵に与っている)。教育面や研究面では、インフォームドコンセント・早期体験学習・クリニカルパス・診療記録開示・EBM・OSCEといった概念と実践の潮流が押し寄せ、自己点検・自己評価とあいまって学外評価がシステム化し、情報はグローバル化した。教育研究の成果をあげるために最も重要なのは確固としたレゾナーデル・目標・目的であるが、私の担当分野の目標と目的がきわめて明確でありつづけたことは幸いなことだった。それは、学部学生へは医師という目的志向型の職業教育を実践することであり、大学院生や院生相当の研修医へは高度専門職業人としての教育と研究指導であった。こうした目的と目標の達成に必要な大学病院での教材(疾病)として、24年間に診療した12万名を越す教育研究資源は量的にも質的にもはば満足すべきものであった。これは県下唯一の先進基幹病院という恵まれた立地に加えて、高度医療の提供サービスに努めた成果だと自負している。その間に訴訟や問題になりそうな事例を一度も経験しなかったことは、当然とはいえ安堵する点である。今や、私の指導を受けて巣立っていった諸君が地域眼科医師の過半を占めるこの頃である。私自身は国立大学での長い勤務の最初から最後まで、診療することそのものが教育であり研究であるという姿勢でやってきた。診療現場でしかできない課題を選んで研究してきたから、基礎的研究で得られるようなブレークスルーとなる成果をあげることはできなかった。それでも、いくつかの新しい疾病を見出して記載するという、いわば古典的な臨床研究を行って内外に発信することができたのは喜びである。



老兵は消え去るのみ

医学部教授 滝川 守国

退官とは自然解任でヨボヨボ爺のイメージを払拭出来そうに無い。しかし、翁も風雪に耐えぬき何とか生き長らえたという意味では、お許し願えるかもしれない。

青年の上昇エネルギーには、敵わないかも知れないが、今後、翁として役立つことがあるとすれば、これまで、培ってきた[生活の知恵]から、時々スパイスをポケットから取り出して、何とかお役に立つように努めたい。

“Old soldiers never die just fade away”とか、彼のマッカーサー將軍は「消え去るのみ」といって退役したそうだが、私という老医も精神年齢で社会に貢献できればと思う。

自分のテーマは、精神医学であったが、21世紀は脳の世紀と謳われ、サイエンスの大きな要ともなってきた。

自分の軌跡は反省の軌跡ですが、脳という高次中枢には、興味がつきず、まだ在野の学徒と時には一緒に歩ける一瞬があればという心境です。皆さん有難うございました。



最近思う事

歯学部教授 小椋 正

2001年9月11日からはテロで明け暮れた大変な一年でした。テロは一部の人を除いて容認する人は殆どいないでしょうが、民族間、宗教間の争いになればそう単純ではありません。その証拠には、現在世界中の至る所で民族間、宗教間の争いを見る事が出来ます。宗教は人を救い人間の我儘を押さえ倫理感ある社会を作る事を目的としていると考えられます。それであるにもかかわらず宗教間での争いが実際に起こっているのは、不可解で在ると言わざるをえません。その理由は他を認めず自分らの事のみを優先させるためだと考えられます。そこで大切なのは他を認める寛容と協調の精神であると言う事が出来ます。21世紀の人間社会で重要なのは、自然との調和と他人を認める寛容と忍耐を持った話し合いと言う事が出来ます。もしそれを達成できなければ、人間社会は崩壊の危機を迎えると思わざるをえません。

2001年9月11日からはテロで明け暮れた大変な一年でした。テロは一部の人を除いて容認する人は殆どいないでしょうが、民族間、宗教間の争いになればそう単純ではありません。その証拠には、現在世界中の至る所で民族間、宗教間の争いを見る事が出来ます。宗教は人を救い人間の我儘を押さえ倫理感ある社会を作る事を目的としていると考えられます。それであるにもかかわらず宗教間での争いが実際に起こっているのは、不可解で在ると言わざるをえません。その理由は他を認めず自分らの事のみを優先させるためだと考えられます。そこで大切なのは他を認める寛容と協調の精神であると言う事が出来ます。21世紀の人間社会で重要なのは、自然との調和と他人を認める寛容と忍耐を持った話し合いと言う事が出来ます。もしそれを達成できなければ、人間社会は崩壊の危機を迎えると思わざるをえません。



感謝の気持ちで一杯です

医学部教授 宮田晃一郎

昭和33年鹿児島大学に入学以来、学生として6年、教官として35年、鹿大を中心に鹿児島で実に43年間お世話になりました。この間、医学部キャンパスの移転などもあり、総括的には誠に楽しく勉強できたことを心から感謝申し上げます。

苦い経験、苦しんだことも勿論ありましたが、先輩・同僚・若い学生達と共に学び、楽しく勉強できる工夫ができたことが多々ありました。それには、やはり自分自身と周囲の方々が健康に恵まれていたことも幸いでした。

大学は今や独立法人化のこと、21世紀COEプログラムのこと、大学院部局化、医歯統合病院のことなど、山積する重要な課題に日夜取組んでおられますが、若い教官や学生に明るい未来を拓くよい結果となることを念願しています。

鹿大で育てていただきましたことに深く感謝し、本学の益々の御発展を心から祈念いたします。今後も鹿児島でお世話になりますのでよろしくお願い申し上げます。



小鬼の反省

農学部教授 中西 喜彦

鹿児島大学に昭和39年に就職して38年間もお世話になり有難うございました。学園の草木や田圃の季節ごとの移り変わり、牧場や演習林での思いでが脳裏に焼き付き、ここに人生の大半を過ごせたことを感謝しております。

数年前、朝日新聞4月の学芸覧に「大学は鬼の住処で、学生さんは入学したらその鬼を探しなさい」という記事を見て、我が意を得たりと思いました。鬼と言うのは世間一般の金・名誉・地位と違う価値観を持って死に物狂いで何かを追及する人種と考えています。しかし、その鬼達もだんだん居なくなってきました。現代は計量化の時代になって、地域への貢献度とかトップ30などの言葉が飛び交うなど鬼も居づらくなって来ました。

ところで、38年間に鬼の巣穴の拡充にはつとめましたが、小鬼の反省としては絶対1位の信念で頑張らなかつたことです。醜いあひるの子ではありませんが、真理の探求には30位でない11位と言う意識改革が必要だったと思っています。

別離



農学部教授 宮内 信文

戦時下、昭和18年、国民学校初等科に入学した。「みんなでべんきょううれしいな、国民学校一年生」。勉強が嬉しいなんて、なんておかしなことだろう、でもそれってほんとうなんだらうなと云い聞かせつつ、「帰る用意」の号令にともかくも今日1日の責務を果たした(そういうことだったのだらう)幸福感がこみあげた。爾来、半世紀弱、私の人生は立場こそ違え、学校社会から一步も出ぬまま推移したことになる。そしてそのことを「世間を知らない」と特に卑下もしないし、「この道一筋」と自慢する気にもなれない。平凡な一人の人間として軍国教育から、あの焼け跡での奇妙な“生きる”実感を味わいつつ始まった民主教育、60年、70年安保闘争、学園紛争...そして衆知の「競争的環境」に至る変貌に正面から対峙しつつ貴重な歴史の一面を実体験した50年であった。

異口同音に「良い時に辞められますね」と言われ、正直にそう思います、と答える。答えざるを得ない。「帰る用意」で嬉しさでなく、云い知れぬさびしさを覚える。何からか分からないけれど“別離”なのかと思う。

21世紀、「発展」から「飛躍」へ



理学部 岩元 秀樹

振り返りますと、鹿児島大学で35年余の長い間、私の人生のほとんどを過ごしたと思いますと全く感慨無量です。

皆様方のご指導とお力添えによりまして大過なく去ってゆくことができますことを心から感謝申し上げます。

さて、大学は、今、大きな岐路に立たされ、構造改革、グローバル化、少子化等大きな波にもまれておりますが、今こそ、じっくり大学改革を考えるよいチャンスではないでしょうか。「自分たちの手で新しい大学を創るんだ」という意気込みで、大学の教職員が一丸となって取り組んでいかなければならないのではないのでしょうか。これまでに、鹿児島大学が地域との強い連携のもとに、学術研究・教育・スポーツ文化等の貢献のために歩んだ道のりを「発展期」とするならば、鹿児島大学の次なるステージは「飛躍期」です。「地域の人に真に愛され、誇れる鹿児島大学へ」。21世紀への大いなる飛躍の実現に向けて、鹿児島大学は邁進してほしいと思います。

私の心のふるさとである鹿児島大学のさらなる発展を祈ります。

退職の年に



法文学部 満 浩一

残すところ一ヶ月余りとなりましたが、退職後の計画はまだ考える余裕がないのが実情です。

学長は、1月4日の仕事始め式の挨拶で、今年の目標を「新たな組織改革再編と大学院博士課程の整備充実 遠山プランへの対応 新リーダーとなる学長の選出の三つを挙げられ、全教職員が一丸となって取り組む必要性を強調されました。

国立大学が改革を行う場合、地域の特色とニーズを教育と研究に取り入れ、地域の活力を創成する役割が更に強く求められてきました。本学は歴史的にも地理的にも特色を生かす条件が整っており、自治体、産業界等からも新しい改革に大きな期待が寄せられています。

今日では、急激な経済の低迷で会社の倒産やリストラ等危機的状況が続いています。学資の支援が絶たれ、志半ばで中退に追い込まれている不幸な暗いニュースは大学人として一日も早く解消してほしい問題と言えます。

学生が安心して勉学ができる社会に戻すためにも、大学としての役割を、この時こそ発信していく必要があるのではないのでしょうか。

退官にあたって

教育学部 有村 勝

35年の公務員生活の終焉を迎え、ほっとした心境が実感である。半分以上を医・病関係に奉職し、城山からの移転構想、移転、跡地の整理等々、肉体を酷使した仕事は今を思えば楽しく充実した時であった。なかでも昭和49年頃のオイルショック下での引っ越し用、ダンボール購入にあたっては、紙不足の影響でなかなか手に入らず、価格は高騰し、大量のダンボール購入に苦慮したことが思い出される。理学部時代には、本学初の政府調達機械を官報公告し、約8割の値引きによるデータステーションの契約事務が行えたこと、平成9年には病院に福祉協議会の協力を得、ボランティアを導入できたこと、教育学部では11年にブッチェル演奏会を開催したこと等、種々の体験できたことは幸運であったと同時に、自分の貴重な財産となり、心の糧にもなっている。今後はこの厳しい時代に鹿大がどのように発展していくか期待を込め見守り、自分もまた、一個人として飛躍していきたいと奮い立っている今日この頃です。

退官にあたって



経理部 片平 紘治

戦後の経済成長の進む昭和36年に奉職し飛ぶがごとく過ぎた40年、過ぎてしまえば早いのが正に歳月でございます。まずは、本学の発展の様子を振り返ってみることに

します。昭和36年ごろの本学は6学部、大学院にいたっては医学研究科のみ、まして全学の共同教育研究施設など皆無でありました。その後幾多の変遷を経て、現在8学部、8研究科、7つの全学共同教育研究施設のほか多数の学部附属施設を有する地域に貢献する総合大学として大いに発展を遂げて参りました。

しかし、創立50周年の節目も終えますますます発展充実していこうというこの時期に、国是として行政改革の嵐が吹いて国立大学の独立行政法人化が目前に迫っており、国立大学の存在さえ危惧され、つい数年前までは考えられなかったことです。

個人的には医学部附属病院での病める患者への対応、庶務課での学報・広報など刊行物の発行、国際交流に少しは役立ったと思われる学生課留学生係、自分も研修生と一緒に受講した人事課での研修担当の経験等々、ほかに都城高専と鹿児島体育大学での貴重な経験もさせていただきました。これらの経験はこれからの人生に大いに役立つものと確信しております。

終わりに、この紙面をお借りして「一期一会」お会いできました方々に心から感謝申し上げます。

42年間の思い出



工学部 新元 勝

昭和35年の3月に高校を卒業後、4月に18歳で海上自衛隊に入隊し、京都の舞鶴市にありまます教育隊で、6ヶ月間カッターの漕艇等の厳しかった訓練をうけた日々がつい最近であつたような気がしています。

光陰矢のごとしともうしますが、桜吹雪が舞い散るなかを防衛の志に燃え、入隊したあの日から、公務員生活も早や42年が過ぎようとしています。

鹿児島大学職員としての振り出しは、昭和42年に水産学部船舶係に採用になり、ここでは、練習船敬天丸、南星丸の代船建造事務に携わったことが思い出として残ります。

また、工学部では、工学部創立50周年事業の一環で、稲盛会館の寄附受けの事務に携わったこと、あるいは、鹿児島体育大学で3年間単身赴任で過ごしたことなどが思い出されます。

3月で退職しますが、今日まで無事に勤めることができましたのは、まわりの皆様方の暖かいご指導、ご鞭撻のお陰と感謝いたしております。最後に皆様方のご健勝とご発展を心からお祈り申し上げます。

おかげさまで退職



経理部 織地 幸一

月日のたつのは早いもので、鹿大での生活にお別れの挨拶をさせていただく事になりました。

ここまでこれましたのもお世話になりました学部、事務局の上司、先輩、同僚、

後輩諸氏のご指導、ご鞭撻のたまものと深く感謝申し上げます。

振り返りますといろいろな事がありました。

最初に勤務した文理学部では、昭和40年に学部改組が行われ徹夜の資料作成になった。

教育学部では、学生運動がさかんな時で、全共闘学生に一時占拠された本部事務局を奪還し、事務局の玄関前に待機中の皆に押しやられて松永教授（格技）と二人で一番先頭に立っていたところ、突然デモ中の学生4～5名が一斉に飛びかかってきた。一瞬身構え対応したところ学生は蜘蛛の子を散らすように引いていった。緊張の瞬間だった。

水産学部では、練習船が遠洋航海の途次東京に寄港した折りに行われたレセプション等に参加し、お見えになる関係者の方への対応等貴重な体験をさせていただいた。

今後、独立行政法人への移行が予定されておりますが、教職員一丸となって対応され難しい局面を乗り越えていただきたいと思ひます。

鹿児島大学の益々のご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

退官を前に思うこと



教育学部 川上 玲子

大学職員生活のスタートを仙台できり丁度20年目に、縁あって鹿児島大学に転勤となり、もう18年も経ちました。ふり

かえってみれば忙しい中でも楽しい事が沢山ありました。北国からやってきた当初、鹿児島のみまゆいばかりの自然に、人々の暖かさに感激しましたが、言葉には大変緊張して、とんちんかんな事をやらかした事など今は楽しい思い出になっています。大学内を異動の度に多くの人々に出会い、仕事はもとより生活上でも種々の方々から、目からうろこのアドバイスを受けながら充実した日々を今まで過ごすことができた事をととても嬉しく感謝しています。学内テニスに十回以上参加できたのも楽しい事でした。大学の中しか知らなかった私に、いよいよ新たな社会へ出発です。今までの出会いを大切にしながら、又新しい出会いと仕事に変わるわくわくする何かを求めて、新鮮な気持ちで飛びたとうと思っています。

定年退職を前にして思う



看護部 西久保レイ子

昭和42年からの長い間、大変お世話になりました。振り返って見ますと、母校の助産婦学校の専任教員時代は助産婦教育のハードスケジュールに悩み苦しみつゝ、当時の森学校長の強い教育方針で、日本母性衛生学会に毎年研究発表演題を持って参加する事が課せられ実践出来た事は貴重な体験であり、今では懐かしい思い出です。又、臨床に来て感銘を受けた事の一つにオーダリングシステムの開発があります。当時の井形病院長のリーダーシップで現場が示す問題点を一つ一つ解決しながら開発を進めていく過程を体験出来たのは幸運でした。病院も大きく変革が求められている今、山積する諸問題の解決に丸となって取り組み大きく飛躍される事と確信いたします。長年のご支援に対し感謝申し上げますと共に、病院並びに看護部の益々のご発展と関係各位のご多幸をご祈念申し上げます。

定年退官を迎えるにあたって



看護部 白澤 彰子

多くの皆様のお蔭様で定年退官を迎えることになった。感謝でしかない。

これまでの三十年余を考えると、私にとっての宝は、出会いである。看護職としての上司の方々、勤務した科の教授や先生がた、先輩や同僚、役割で出会った諸先生方、そして、患者さんやご家族の方々の生きざまや、励ましや、言動。思い出すにつけ、少しは考えることを学んだらうかと反省する。

今、社会も大学も変革の時である。大学病院にも変革の波は押し寄せ、日々、大変な想いを今後も抱くのだろう。退官する私にも、人生の波や節がある。どんなに波が大きくても、衝撃を少なくする方法を考え、節目を大切にしようと思う。その為にも、人や物との出会いを宝として、定年後の飛躍への足がかりとしたい。

人生の第2章



看護部 寿福美智子

この道ひとすじ何年といわれますが、看護の道を30有余年、同じ場所で過しました。日本列島改造論からオイルショック、バブル崩壊と時が流れ、景気回復に時間のかかる昨今です。

就職2年目に退院患者様より手作りのお守りを頂きました。「勇気とは忍耐のことをいうこともある」と几帳面な文字で書いてあった。頂いた当初は意味が理解できなかったが仕事でゆきづまったり、考えがまとまらないときに「勇気とは忍耐のことである」つまり「忍耐とは勇気のことである」とも考えて、自分を叱咤し、困難を乗り越ってきたと思う。

患者様から多くのことを学び、自分自身成長させてもらったことに感謝しています。

職場での人生を第1章とすれば、これからは自分で自分を探す人生を第2章として、学習を重ね、これまでの経験を社会に還元できたらと思っています。

退官に寄せて



看護部 山崎 京子

還暦です。長年にわたる看護職生活を卒業致します。振り返りますと、昭和40年代は不十分な設備と看護婦及び物品が不足する厳しい職場環境でした。「看護とは何ぞや」「日常生活の援助は誰が担うのか」等、教授達と対等に熱く議論される婦長や先輩の雄姿に魅了されたことを懐かしく思い出します。

城山時代は忙しい時間帯のみ勤務する断続勤務や1人夜勤があり、只ひたすら働くことが当然でした。桜ヶ丘地区移転後はコンピューター導入による看護支援システム構築・“活き活きボランティア活動”への参加等、病棟の患者さんと泣き笑いを共にする看護ができましたことは大変幸福でした。ここまで職務を全うできますのも多くの皆様の励ましと支えを賜りましたことと心から感謝申し上げます。退官後は歳を重ねてわかる看護、未知なる看護に微力を尽くせたらと思いを馳せています。最後に、21世紀、人々の健康に向けて鹿児島大学病院のご発展を祈念いたします。

特別 寄稿



遺伝子診療の進歩に想う

光と影

鹿児島大学運営諮問会議委員（鹿児島県医師会会長）

鮫島耕一郎

筆者は4年前から日本医師会生命倫理懇談会のメンバーとして、各界の専門家から「先端医療の進歩と生命倫理」についての多くのことを学んだが、ここにはその中の「遺伝子診療」をとり上げてみたい。

20世紀において驚異的發展を遂げた科学技術、そして医学・医療は21世紀においても飛躍的發展が予想され、その勢いは止まるところを知らない。特に、遺伝子医学・生殖医学・再生医学などに象徴される医学・医療の新しい展開には目を見張らせるものがある。

例えば、ヒトゲノム（生命の設計図、染色体、DNA）解析研究については、2000年6月26日に米国クリントン前大統領と英国ブレア首相は「我々のゲノム解析は終わった」という連名のメッセージを発表し、「人類が手にしたもっとも重要でもっともすばらしい地図だ。我々は神が創造した生命の言葉を学びつつある」という文言は有名である。

私共の日常臨床の場においても、高血圧・糖尿病・高脂血症などの生活習慣病やアレルギー性疾患・悪性腫瘍・感染症などあらゆる健康の問題に遺伝子に関係することが明らかになってきた。これらの遺伝子情報（ヒトゲノム）が今後ますます医療の場で利用され、病気の原因究明、新しい治療法の開発、個々の病人に応じたオーダーメイド医療、病気の予防、薬剤耐性菌などの克服がここ数年、おそくとも10年以内には実現するであろうと予測される。

後世、「20世紀は治療医学の時代であったが、21世紀は予防医学の時代である」と評価されるかも知れない。

「遺伝子診療」は主治医对患者という従来の医療の枠組みだけで行うことは困難であり、遺伝医学研究者・臨床心理士・臨床検査技師・看護婦などのチームワーク医療として慎重に取り組む必要がある。

日本人類遺伝学会は「臨床遺伝学認定医制度」を1991年から設立し、すでに約400名を認定しているが、

信州大学附属病院遺伝子診療部の先駆的取り組みは高く評価されている。

私共の鹿児島大学附属病院でも昨年から「遺伝カウンセリング室」を開設し、相談に応じているが今後の発展を期待したい。

ゲノムのもたらす「経済効果」についてみると、医療（個人の特質に最適な治療法選択、オーダーメイド医療、遺伝子治療、再生医療）、医薬品（遺伝子タイプに応じた医薬品の創薬）、食品（体質に応じた食品、食べるワクチン）など、今後10年間に6兆円以上の効果があると試算されている。

一方、「光があれば必ず影が生ずる」とよく言われるが、例えば2000年2月、ある医療機関が健康診断で採取した血液5,000人分をインフォームド・コンセントなしに勝手に遺伝子解析に用いた事件が発覚した。大変な人権侵害である。

また、最近「遺伝子診断」を看板に掲げた検査会社や開業医が出現し、インターネット上で「遺伝子検査が可能にした21世紀の予防医学！遺伝病はもちろん、ガン・糖尿病などの発症リスクが血液や口内粘膜の遺伝子を調べるだけですべて判明する」と専門家からみるとトンでもないインチキな宣伝文句をうたい、高額な検査料を手に入れている。現段階では一部の病気を除いてはまだ夢に過ぎず、誇大宣伝である。（東大中村祐輔教授、文芸春秋2001年4月）

また将来、「遺伝子診療」が本格的に日常診療の場に登場したときは、高額の「医療費」をどう扱うかという問題も避けられない。

最後に、ヒトゲノム計画が人類の幸福のためにさらに画期的に発展していくことを心から期待し、願うとともに、かつて原子核の操作に成功した英知が逆に大量殺人兵器にってしまった大きな悲劇を二度と繰り返さないよう、「先端技術の繁栄と制御」のバランスを祈りたい。

平成14年 年頭の挨拶

学長 田中 弘允

ただいまから平成13年度第23回評議会を始めたいと思います。まず最初に、学内LANを通じて年頭の御挨拶を申し上げます。

鹿児島大学の評議員並びに教職員の皆様、新年おめでとうございます。平成14年が皆様にとりましてすばらしい年でありますよう心からお祈りいたします。

私達は前世紀において科学技術の発達のおかげで大変便利な生活を享受することができるようになりました。しかしながら、それにも増して多くの様々な課題の解決に迫られています。最近行き詰まりを見せ始めた資本主義世界経済に代わるべき新しい秩序の形成、グローバル化に伴う貧困の撲滅、地球環境の保全、食糧の確保、地域社会のあるべき姿、宗教・文化・民族の多様性の尊重、人間性の尊重などが地球的・社会的課題としてあげられています。わが国では、これらに加えて、不況対策、財政構造改革、少子高齢化対策、福祉対策、いじめなどの教育問題等があります。全人類はこれらの課題を全力をあげて解決し、よりよい21世紀社会を築くという使命を果たさなければなりません。このような情勢の中で私達大学人は、高等教育、学術研究を通じて社会に貢献することがより一層求められています。

今年は鹿児島大学にとりまして特に大きな意味のある年であると思います。

まず第1に、今年は新たな組織再編を含む改革を実行する年であります。

本学は平成9年に4(6)年一貫教育を柱とする組織改革を行いました。4年経過した昨年より、更なる改革を計画して参りました。その目的は、個性豊かで社会から必要とされる総合大学を創成することであり、具体的には 社会の要請への適切な対応、教育・研究の質の向上、変化に強い柔軟な適応力・構想力の創造などを実行するためであります。この4月からは学内措置として、あるいは平成15年度概算要求としてこの計画を実行に移さねばなりません。この改革は、すべての学部あるいは大学院、附属病院等に関連しており、その中に

は、農学部の改組を伴う獣医学科の充実、大学院医学研究科・歯学研究科の重点化、部局化、医学部・歯学部附属病院の統合、教育学部・教育学研究科の改組・充実、理工学研究科の改組、農学水産学研究科の改組が含まれています。また、教育センターの新設、地域共同研究センターや総合情報処理センターの充実も行います。

教育研究組織の創成と共に大切なことは、それを使って教育・研究・運営を行うにふさわしい教職員の存在であります。国立大学の一員である私達大学人は、大学人の良心に従って自らの教育研究の意義を不断に問い直し、その成果を評価し、あるべき教育研究を内発的に実行していかなばなりません。例えば、教育研究分野を変更あるいは拡大することや自らがその役目にふさわしいかどうかを考えてみることも必要でしょう。

特別な年である第2の理由は、大学(国立大学)の構造改革の方針(いわゆる遠山プラン)に対して本学として一定の方針を打ち出す年でもあるからです。

構造改革の方針の第1は「国立大学の再編統合」に関する事項であります。これについては、本学は全くその必要性を認めないのであります。本学は従来、地域社会に根ざし世界にはばたく総合大学を目指して改革を進めてきており、一定の成果をあげて参りました。「大地・食・人間の健康を保全する環境革命への試行」、「新しい関係性を求めて」、「地域学の創造；新しい鹿児島学」などを含む7つの全学合同研究プロジェクトがそ例であります。しかも、今後は地域との関係を更に深める構造改革を計画しています。すなわち、本学と地域社会との間に全面的で根本的な知的交流関係を築き、両者の相互的・相乗的活性化を図ります。具体的には、大学が地域社会の現場へ赴き、地域社会との問題の共有及び共同解決、地域社会の活性化を図ると共に、大学は地域現場の複雑で多様な問題に共同で取り組むことにより、変化に強い柔軟で現実的な人材の育成、教育・研究の活性化を実現できるのであります。

教育学部や獣医学部の再編についてもまた、その必要

性を認めないのであります。21世紀のこの国を担う人材の育成は極めて重要でありますので、離島を多く抱え南北600kmに及ぶ本県の学校教育現場における教育学部の存在意義は極めて大きいものがあります。本学教育学部には、教員養成に特化した学部・大学院の教育・研究組織やカリキュラムの充実こそが今求められており、同時に教職員の使命感と柔軟な思考が期待されています。

獣医学科について言えば、日本の畜産基地である本県にとって必要欠くべからざる教育研究組織であり、本学の個性・特徴をなすものでありますから、他県の大学への統合などは、地域に根ざした本学にとってもまた地域社会から見ても全く不適切と言わざるを得ないのであります。

方針の第2である「国立大学法人」については、文部科学省調査検討会議の「連絡調整会議」で最終報告へ向けて現在審議が続けられています。もし、最終報告の基本的枠組が中間報告と変わりがなければ、独立行政法人通則法の特例を求めて国大協や文部科学省が期待した特例法ないし特例措置がほぼ設計不可能であったことを示していることとなります。すなわち、この法人では、学問の自由が経営の自由に従属せしめられており、しかもこの経営の自由は政府権限と直結していますので、その強化と連動する可能性があります。大学本来の学問的使命に対するこのような歪曲は、国際的にも例を見ない国辱的な制度であります。また、競争原理の教育・研究への全面的導入は、財政基盤の弱い地方国立大学と地域社会にとって極めて憂慮すべき事態であります。

昨年9月私達28名の地方国立大学長は、「国立大学法人」とは別に、「国立大学地域交流ネットワーク」構築という大学構造改革案を文部科学省に提出し、記者発表を通じて全国に発信しました。それは、地方国立大学と地域社会との間に全面的で根本的な知的交流関係を築いて両者の相互的・相乗的な活性化を図ると共に、この関係を全国的に結合し日本の地域社会全体をネットワークで支えるという構想であります。21世紀に重要な役割

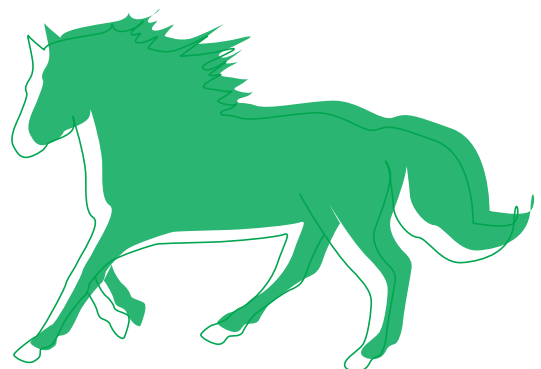
を果たすべき国立大学の制度改革が、真に高等教育・学術研究の発展という観点から、冷静にそして国家の未来を見据えて決定されなければならないと考えます。そのためにも大学人の立場から発言を続けなければなりません。

方針の第3の「トップ30」については、概算要求で180億円余りが内定していますので、本学からも積極的に打って出なければなりません。博士課程を持つ、医学・歯学・理工学、連合農学、連合獣医学の各研究科はその獲得に全力をあげてもらいたいと思います。

特別な年である第3の理由は、本学の第10代学長を選ぶ年であるからであります。来年から始まる4年間は、本学にとって極めて重大な時代であることが予想されますので、それにふさわしいリーダーを選ぶことが大切であると思われまます。本学の過去・現在・未来を洞察し見識ある選考が行われんことを心から祈るものであります。

また、私の在任6年間の本学の足跡についても何らかの評価が行われ、これを基に次期学長の時代の鹿児島大学の発展に資することができればと考えています。

今年は午年。この時期をチャンスととらえ、高等教育、学術研究は天職であるという自覚と誇りを持ち、全教職員一致協力して大きな飛躍の年にしようではありませんか。



随 想

スウェーデンの思い出

昨年春から夏にかけて、日本学術振興会の特定国派遣制度により5ヶ月間のスウェーデン滞在の機会を得た。首都ストックホルムから電車で50分ほど離れたウブサラという町にある、スウェーデン農科大学のバイオマスエネルギー研究グループに籍を置かせていただいた。スウェーデンでは木質廃材や泥炭といったバイオマス燃料が総エネルギーの約20%を供給しており、バイオマスエネルギー利用の先進国である。様々な情報の共有が大切であると考え、今回は専門以外で得た見聞を紹介させていただく。

スウェーデンの国土面積は日本の1.2倍、人口は約860万人で、九州全体から福岡県と沖縄県を除いた人口とほぼ同じ程度である。最大の都市ストックホルムでも人口は80万人程度であり、北部のラップランドでは人よりもトナカイの方が多い、というもあながち冗談ではなさそうである。「とにかく人間が少ない」という印象は最後まで変わらなかった。

さて、ウブサラ市内には北欧で最も古い歴史を持つウブサラ大学があり、その図書館に併設されている博物館を訪ねた際、江戸時代の日本（確か京都のものであったと思う）の地図を見つけた。なぜこんなところにあるのだろうか、不思議に思っていた。後日、市内にあるリンネ（18世紀の博物学者であるリンネはウブサラ大学の教授であった）の資料館で謎が解けた。リンネの弟子であったツンベルグが鎖国時代の日本へオランダ人になりすまして調査にやっていたのだった。その情熱に驚くばかりである。長崎から江戸（東京）への道中で植物標本を採集していたようである。確かに彼の名前（Thunbergii）が学名に付く樹種には、クロマツ、タブノキ、イヌビワ、ソテツなど九州内でよく見かけるものが多いことに気づいた。

さらに驚いたことが2つある。英会話と大学の教育システムである。

ある教授の退官記念セミナーでの出来事である。最初に「スウェーデン語のわからない方は？」と質問があり、

イギリス人と私の二人だけが手を挙げた。するとその後の講演は全て英語で行われ、その後の質疑も英語であった。聴衆の大部分はスウェーデン人であったにもかかわらずである。大学内という特殊事情を差し引かねばならないが、英会話能力の高さと言語マイノリティに対する配慮に感心した。

スウェーデンの大学の1学年暦は2学期で構成されている。授業はコースと呼ばれており、それぞれのコースには難易度（A～Dの4段階）と履修に必要な学習内容が設定され、シラバスに明記されている（例えば、生物学のBレベルを20単位、経済学のAレベルを10単位習得した者のみ履修可能という具合である）。1単位は1週間の学習分に相当しており、5単位のコースは5週間をかけて行われる授業群である。日本的に言うならば、5週間の集中講義ということである。当然ながら、複数の教官が交互に担当する。このコース期間中に講義、セミナー、実験・実習あるいは見学旅行といったあらゆるメニューが組み込まれており、原則的にある期間内は一つのコースしか履修できないようになっている。教育・学習効果がどの程度違うのか不明だが、参考になるシステムであると思われる。ちなみに、スウェーデンの大学の学費は無料である。大変うらやましい制度であるが、所得税は約50%、消費税は25%という現実で支えられている。

日本の大学は大きな変革を求められている。海外の大学のシステムを模倣する必要はないが、謙虚に学ぶべき点は少なくない。EU内での研究予算獲得競争などの厳しい現実に触れることもでき、大いなる刺激を受けた滞在であった。



農学部 寺岡 行雄



保 健

下痢症 急性下痢症について



保健管理センター所長 前田 芳夫

下痢とは、その排便回数や排便量に関係なく、便通の性状が泥状ないしは水のような状態をいいますが、ときには粘液や血液が混入する場合があります。また、この下痢にも、急激に起こってくる急性下痢と長期にわたって持続する慢性下痢があります。このうち私達が日常よく経験するのは、前者の急性下痢です。保健管理センターにも、下痢を訴えてくる学生が多くみられますが、その殆どは急性下痢の学生です。下痢は、単に下痢だけの場合もあれば、下痢の他に、悪心・嘔吐や発熱、腹痛を伴っている場合もあります。

皆さん方も、ご存知のように、下痢は小腸や大腸での水分吸収が不十分な場合に起こります。小腸や大腸を支配している神経は、交感神経や副交感神経といった自律神経ですが、小腸や大腸は、この自律神経の支配下にあつて、その腸管粘膜から水分や栄養分を吸収しています。就中、小腸の粘膜では、粘膜が絨毛を形成して、その表面積を大きくし、水分や栄養分を十分に吸収できるようになっています。従つて、下痢は、これらのいずれかに障害が生じた場合に起こります。例えば、精神的なストレスで自律神経のバランスがくずれたりしますと、小腸や大腸の動きが異常に高まり、その結果、食物の腸内通過も速くなり、水分や栄養分の吸収が十分に行われなまま排泄され、下痢になります。我が国には、昔から「断腸の思いをする」とか、「腸（はらわた）が煮えくり返る」などの言葉がありますが、これらもまた、精神的なストレスが小腸や大腸と密接な関係にあることを示しているものと言えます。また、冷たい飲物や脂肪分に富んだ食物を多く摂ったり、寝冷えをしたりした時にも下痢が起こります。その他、牛乳や卵、竹の子等で下痢を起こすアレルギー性下痢もあります。しかし、これらの下痢では、多くの場合、単に下痢のみで、悪心・嘔吐や

発熱を伴うことはありません。このような下痢を総称して、急性非感染性下痢と言います。一方、ウイルスや細菌感染によって、小腸や大腸の粘膜に病気が発生しますと、水分や栄養分の吸収が阻害されて、下痢が起こります。そして、このような場合の下痢では、下痢の程度が極めて強く、また、悪心・嘔吐や発熱、腹痛を伴い、時には下痢に粘液や血液が混じることもあります。原因は腐敗しかかった食物の摂取です。このようにウイルスや細菌感染によって引き起こされる下痢を総称して、急性感染性下痢と言います。

下痢の予防は、これら下痢の原因となるものを避けることです。一方、下痢になった場合には、下痢を止めることと脱水防止に努めなければなりません。具体的には、下痢の原因と考えられるものを避け、食事は、お粥と塩、梅干しとし、緑茶を多く摂ることで、緑茶は止痢作用のあるタンニンを多く含んでおり、水分補給にもなります。私自身、患者さんには、下痢の期間中は、緑茶以外の水分摂取は極力避け、止痢剤等の服用も緑茶で行うよう勧めています。また、全身倦怠感が強い場合は、黒糖を摂るようにも勧めています。その他、腹巻きや懐炉等による腹部保温も大切です。

このようにすることで、急性非感染性下痢では、下痢が止まることもあります。しかし、このようにしても下痢が止まらない場合は、医師の診察が必要となります。とくに、悪心・嘔吐や発熱、腹痛を伴うような急性感染性下痢では、生命の危険を伴う場合もありますから、尚更、医師の診察が必要となります。

以上、主として、急性下痢について述べてきましたが、慢性下痢では、その背後にいろいろの病気が隠されていることがあります。慢性下痢の方は、ぜひ専門医の診察を受けるようにして下さい。

NEWLY
APPOINTED

新任教官紹介



職名 講師
氏名 おり はら よし ゆき 折原 義行
(医学部医学科)
学位 博士(医学)
生年月日 昭和31年1月30日
最終学歴 長崎大学大学院医学研究科博士課程修了

前職 長崎大学講師医学部
担当科目 法医学

【抱負】

ひとりでも多くの学生が本学および本教室に入局するような魅力ある講義・研究を行いたいと考えております。



職名 講師
氏名 よし の しん じ 吉野 伸司
(医学部附属病院)
学位 博士(医学)
生年月日 昭和35年2月24日
最終学歴 鹿児島大学医学部医学科卒業

前職 鹿児島大学助手医学部附属病院
担当科目 整形外科

【抱負】

肩の力を抜いて、リラックスして臨床研究、学生教育等に頑張ろうと思います。



職名 助教授
氏名 やま ぎ しず お 八木 男
(医学部附属病院)
学位 博士(医学)
生年月日 昭和29年3月14日
最終学歴 金沢大学医学部医学科卒業

前職 鹿児島大学助手医学部附属病院
担当科目 急性血液浄化、腎移植

【抱負】

急性血液浄化療法の充実と慢性腎不全患者の合併症治療、特に重症例における術前・術後管理の充実に向けて尽力したいと思います。



職名 講師
氏名 にし やま けん りゅう 西山 賢龍
(医学部附属病院)
学位 博士(医学)
生年月日 昭和35年9月16日
最終学歴 鹿児島大学医学部医学科卒業

前職 鹿児島大学助手医学部附属病院
担当科目 泌尿器科学

【抱負】

尿路性器癌、特に腎癌、膀胱癌、前立腺癌での抗癌剤耐性克服法の開発に尽力し、臨床面への応用をすすめていきたい。



職名 教授
氏名 岸 文雄
(歯学部歯学科)
学位 医学博士
生年月日 昭和29年2月23日
最終学歴 山口大学大学院医学研究科生理系生化学博士課程修了

前職 山口大学助教授遺伝子実験施設
担当科目 口腔細菌学

【抱負】

自然科学の研究を通じた人類の福祉への貢献が目標。



職名 助教授
氏名 田畑 純
(歯学部歯学科)
学位 博士(学術)
生年月日 昭和36年4月28日
最終学歴 広島大学大学院生物圏科学研究所博士課程後期修了

前職 大阪大学助手歯学部
担当科目 組織学・発生生物学

【抱負】

どうして歯は一度しか生えないのか？どうやって歯の形が決まるのか？こうしたことが研究テーマです。よろしくをお願いします。

職名 教授
氏名 箱山 晋
(農学部生物生産学科)
学位 農学博士
生年月日 昭和21年2月10日
最終学歴 九州大学大学院農学研究科博士課程中退
前職 独立行政法人農業技術研究機構作物研究所研究交流科長
担当科目 熱帯作物学

【抱負】

熱帯地域も各々に地史、自然、歴史、文化の背景は異なる。各問題に適切な対処が出来る素養が育める教育・研究指導を目指したい。



職名 教授
氏名 馬嶋 秀行
(歯学部歯学科)
学位 歯学博士
生年月日 昭和30年2月16日
最終学歴 日本大学大学院歯学研究科博士課程修了

前職 独立行政法人放射線医学総合研究所放射線安全研究センター主任研究員

担当科目 歯科放射線学

【抱負】

21世紀を迎え、中央地方行政から地域発展行政へと移り変わりつつある。鹿児島が世界への発信基地となるよう努力したい。

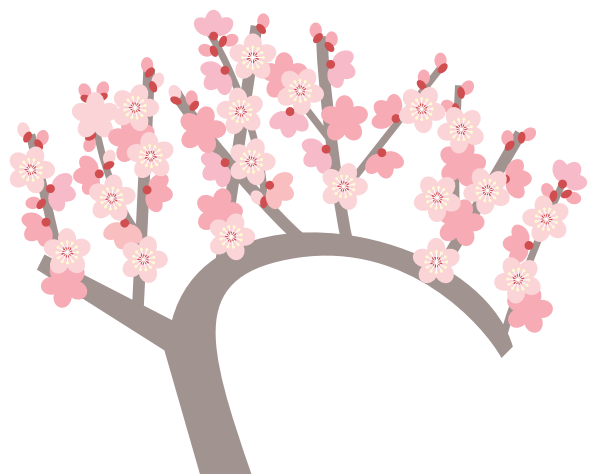


職名 教授
氏名 山下 喜市
(工学部電気電子工学科)
学位 工学博士
生年月日 昭和19年5月30日
最終学歴 静岡大学大学院工学研究科電子専攻修士課程修了

前職 (株)日立製作所・中央研究所技術主幹
担当科目 通信工学特論(院)、電波工学、電気電子工学入門

【抱負】

光ファイバ通信やモバイル無線、それを支えるシステムLSIの研究を行うと共に、実戦的で自立した研究者、技術者の育成に注力します。

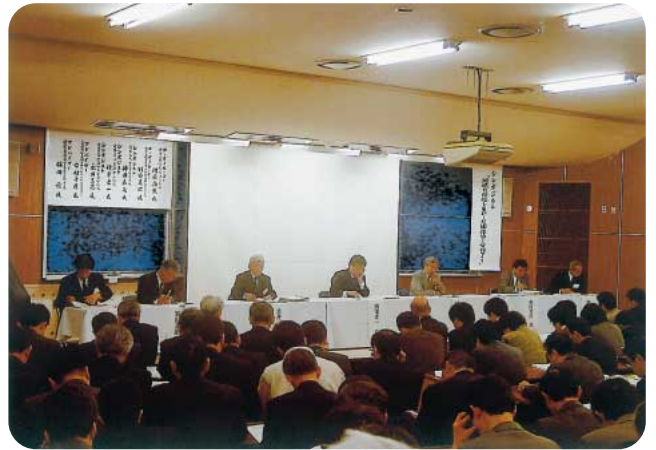


平成13年度新教育課程研究協議会開催さる

教育学部 数学教育講座 植村 哲郎

平成13年12月15日、文部科学省および鹿児島大学の主催で、平成13年度新教育課程研究協議会が鹿児島大学教育学部において開催された。この研究協議会は、平成14年度から実施される新教育課程の理解推進事業の一環として、3年前から全国の大学で実施されてきているもので、九州では、これまでに福岡教育大学、熊本大学、大分大学で開催された。今年度は新教育課程実施前の最終年度にあたる。

当日は午前中に、文部科学省布村幸彦氏による全体講演「新しい学習指導要領の実施に向けて」、シンポジウム「地域の特性を生かした個性的な学校づくり」が行われ、午後からは、3つの分科会で「特色ある総合的な学習の時間を創造するために」「地域や学校、家庭における心の教育のあり方」「基礎学力の捉え方とその向上を図るための実践のあり方」について、それぞれ熱心な研究協議が行われた。県内はもとより九州各地からの、約700名の教師、保護者、教育関係者、学生の参加者があり、今日の教育問題への関心の高さを感じさせるものであった。



国立天文台天文広域精測望遠鏡・鹿児島大学光赤外線天体観測システムの紹介

理学部 物理科学科 面高 俊宏

「新鹿児島県百選」にも選ばれたのだかな山あいにある入来町の鹿児島大学農学部附属入来牧場。直径20mの電波望遠鏡が宇宙のかなたをにらんでいる。国立天文台と鹿児島大学が協力して進めているVERA入来局望遠鏡だ。

岩手県水沢市など国内4ヶ所（水沢、入来、父島、石垣島）に同型の電波望遠鏡を設置し、同時に天体観測して直径2300kmの超巨大な電波望遠鏡を作り、世界で初めて天の川銀河の精密立体地図を作るという壮大な計画だ。地球の公転を使った三角測量法で、光のスピードでも数百万年かかるような遠方の数千の星までの距離を正確に測ってゆく。この性能を得るため望遠鏡には最先端、最新鋭の技術が導入されており、世界が注目している。

このVERA望遠鏡の背後の山頂には九州で最大口径の鹿児島大学1m光・赤外線望遠鏡が完成し、観測が開始されている。この望遠鏡の狙いも壮大だ。約1年ほどの周期で明るさを変えるミラ型変光星という星を観測する。この星の新しい明るさ（絶対光度）と周期の間には綺麗な関係があると考えられており、VERA望遠鏡とこの望遠鏡とが協力すればこの変光星の正確な変光周期と絶対光度の関係が決まる予定だ。この関係を使うと宇宙の物差しとなり、我々の澄む天の川銀河から遠く離れた銀河までの距離も正確に測れるし、膨張を続けているという宇宙の大きさも測れるはずだ。VERA計画と光赤外線望遠鏡の世界的なプロジェクトに鹿児島大学の学生、研究者たちが重要な役割を果たそうとしている。

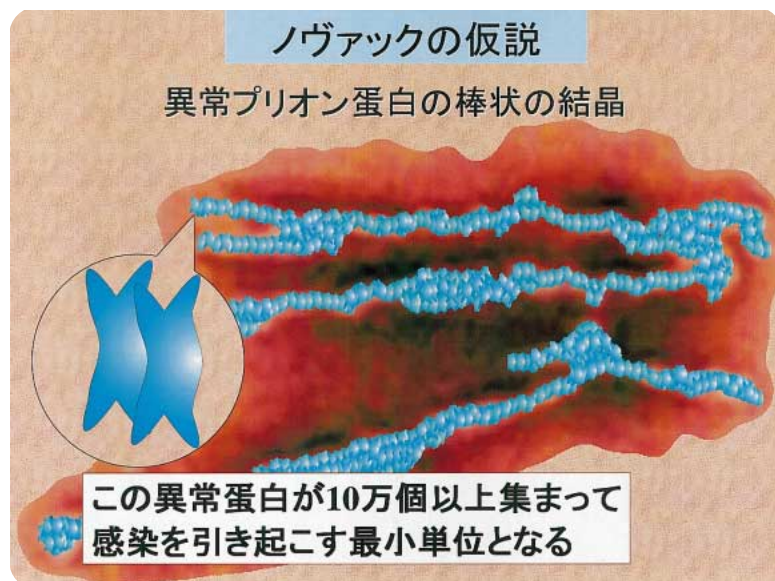
入来町も両望遠鏡の完成に大きな関心を示し、駐車場建設などVERA望遠鏡の周辺環境整備を行い、9月に行われた両望遠鏡の開所式には福元町長が「両望遠鏡のできた喜びと宇宙を中心とした町づくり」を熱っぽく語られた。また、入来町、国立天文台、農場、理学部関係者による合同委員会の設置が準備中であり、夏にはゴルフ場までを入れた大きなイベント案作りが予定されている。鹿児島大学と地域との連携のモデルとして発展が期待されている。



鹿児島大学牛海綿状脳症（BSE）対策プロジェクト

農学部 獣医学科 岡本 嘉六

食の安全を巡る未曾有の事態を引き起こしている牛海綿状脳症（BSE）を制御しヒトの健康危害を防止することを目的として、昨年10月に、農学部獣医学科坂本紘教授を代表とする全学プロジェクトを立ち上げた。家畜衛生や食肉検査に従事している農学に加えて、医学、歯学、工学、水産学等の教官が参画し、相互に協力しながら実験・調査研究を展開する。飼料ならびに飼育管理における安全性確保対策を検討するグループ、先発研究機関と緊密な連携を取り牛海綿状脳症の診断法を検討するグループ、プリオン病の病態と発症メカニズムを検討するグループを作った。さらに、問題の大きさと深刻さを受け止め、地域産業の振興と国民生活の安定のために、食肉の安全性について正しい理解を広めることも任務の一つと考え、12月22日に市民公開講座「もっと知ろう！ プリオン病（狂牛病）」を開催し、納光弘医学部附属病院院長が、感染最小単位についての最新学説を講演した。



(株)BMTハイブリッド起業

工学部応用化学工学科（4月より大学院理工学研究科ナノ構造先端材料工学専攻） 明石 満

バブル後の厳しい環境、大学だけが旧態依然として許される状況ではない。内外に、これまでの成果と貢献をはっきり示して初めて継続が許される。また、社会に将来ビジョンをわかりやすく示して初めて継続が許されると理解している。大学発のベンチャーを短期間に1000生み出すとの首相のアイデアに期待はあっても反対の声は聞かない。本学には京セラ寄附講座もあり、ベンチャー起業への期待も高い。また、学部間に垣根を設けずに総合大学として機能させることも我々の責任であろう。長年かけて準備したことで少しはお役に立てると思い、リスクを負ってスタートさせた。10数年共同研究を続けてきた信望厚い医師でもある丸山征郎教授、エイズワクチン完成に燃える盟友馬場昌範教授、科学庁プロジェクトのリーダーを務めた檜作進名誉教授、基礎研究と学生・若手研究者指導に必要以上に厳しく、サイエンスと社会への貢献こそが大学人の生きがいであることを示してきた研究の虫達が集まって、(株)新日本科学の強力な、また鈴木油脂工業(株)にも協力を得て起業に至った（大西瑞男社長（元医学部助教授））。BMTとはBio Medical Technologyを意味する。

バイオ特に医科学と工学のハイブリッド、間違いなく鹿児島大学を基盤とした、大学と民間企業のハイブリッドである。知恵絞って、汗かいて、確立は低いだろうが成功させたい。ご支援ください。

BMT
hybrid

図書館だより

1. 小学校・中学校・高等学校の全教科書を配架

附属図書館では、全国の小・中・高校で現在使用されている教科書をすべて受入し、中央図書館3階の参考図書コーナーに配架しています。

教科書問題については各方面で議論されているところですが、併せて本学学生の育成歴の参考としてこの機会に是非ご利用ください。

なお、今後は教科書改訂の都度購入し、配架していく予定です。

内訳：小学校教科書346冊、中学校教科書141冊、高等学校教科書1,156冊 合計1,643冊



2. 携帯電話対応版「図書館ホームページ」の利用について

携帯電話から図書館ホームページにアクセスすることが出来るようになりました。

i-mode、EZWeb、J-Skyのいずれかに対応した携帯電話をお持ちの方はどこからでも利用できます。

携帯電話対応版URL

<http://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/kopac/>

このURLに直接アクセスして頂きますと下記のメニューが利用出来ます。

1. 図書館からのお知らせ
2. 蔵書検索（本学所蔵の図書・雑誌を探す）
3. 貸出状況（今、自分が借りている図書の確認）

「3. 貸出状況」では、現在自分が借りている図書の一覧に加え、貸出予約している図書がある場合はその図書も一緒に表示されます。

なお、貸出状況メニューを利用するためには、図書館利用票もしくは学生証に記載されたカード番号とパスワードが必要です。パスワードの変更は図書館ホームページOPACからしか出来ませんのでご注意ください。



行事予定

2月

25日 前期日程一般選抜(26日 まで)

3月

2日 卒業・修了演奏会(於:鹿児島市民文化ホール)(教育学部)

7日 前期日程合格発表

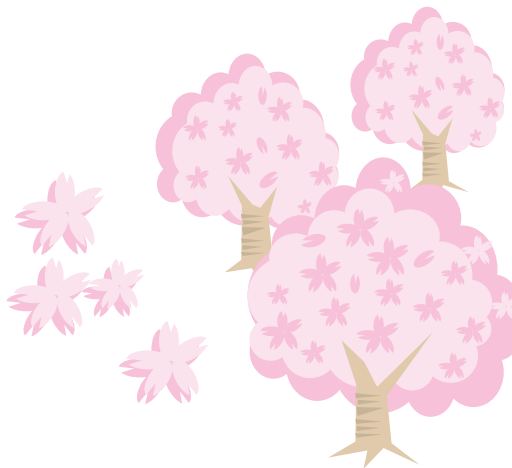
12日 後期日程一般選抜(13日 まで)

18日 連合農学研究科学位授与式

22日 後期日程合格発表

25日 卒業式(於:県体育館)

27日 医療技術短期大学部閉学記念式典
卒業・修了制作展(於:県歴史資料センター黎明館31日 まで)(教育学部)



4月

4日 入学式(於:県体育館)

12日 連合農学研究科入学式

編集後記

鹿大広報第159号をお届けします。本号は特集記事のテーマを「飛躍」として、今春めでたく卒業または修了される予定の21名の方々、そしてご退官を迎えられる教職員の方々にそれぞれの思いを語っていただきました。

一つの区切りを完結した充実感、感謝の気持ち、後悔の念、将来に対する期待と不安、などなどさまざまな思いが綴られています。社会がここを巣立つ若い彼らを優しく受け入れ飛躍させてほしい、と願わずにはおられません。ご退官される教職員の方々には、永年にわたり鹿児島大学の発展に尽くしていただきましたことに感謝し、これからの人生に幸多かれ、とお祈りしております。学長にはお忙しいなか、お祝いのメッセージを寄せていただきました。ありがとうございました。

本号には、本学運営諮問会議の鮫島耕一郎委員に、特

別寄稿「遺伝子診療の進歩に想う」をいただきました。本号の内容にいっそう厚みを加えていただきましたことに感謝申し上げます。

学内だよりではまず、学内LANを通じて全学にライブ中継された第23回評議会での学長の年頭挨拶(全文)を紹介しました。学長は三つの理由をあげ、2002年は本学にとって特に大きな意味のある年である、と強調されました。学内だよりではそのほか、随想、保健、新任教官紹介、学内ニュース、図書館だより、行事予定の各記事を掲載しました。ご多忙のなか原稿をお書きいただいた執筆者の方々に御礼申し上げます。

表紙は前号と同じく教育学部の小江先生のデザインによるものです。感謝申し上げます。

広報誌編集専門委員会委員長 下川 悦郎